

樽廻船にまつわる事蹟を追って

西川 卓志

はじめに

筆者が勤務した西宮市立郷土資料館は、市域の考古資料・民俗資料・古文書等を収集して公開する典型的な地域博物館であった。その設立準備が始まったのが昭和56年度、多くの方々からご指導ご教授を得て地域史に関する情報を整理し、展示計画策定委員会や展示業者との調整を行う日々であった。展示情報の正確さを期すために各地に出向いて調査をさせていただいたものの、時間の関係で既知の情報そのままに頼らざるを得なかったものもあった。特に、市域から遠く隔たった土地に関するものでは、既存情報のみを頼りに作成せざるを得なかった解説パネルもあった。後日を期した裏取り調査と現地確認作業に長年を要したのが、江戸時代の酒荷積み専用船「樽廻船」の航路を示したパネルに関するものである。ここでは、パネルに記載された伊豆半島南端に所在する風待ち港を訪れる機会があったので、記して現地確認の一略報としたい。

1 樽廻船の航海

江戸時代以来、西宮が灘五郷の一角を占める銘醸地であることは周知の通りである。その酒荷を積んで西宮・大坂-江戸間を航行したのが樽廻船である。江戸期の千石積みの大型船といえば弁才船、大坂から瀬戸内を西行して日本海をめぐる北前船と、大坂・江戸の各問屋が差配

する樽廻船・菱垣廻船が主要なもので、それぞれに江戸期の遠隔物流を担った。北前船は船頭が積荷を各寄港地で売り捌く地売りを主体とする一方、樽・菱垣両廻船は原則積み込んだ荷物を江戸に搬入することが主体で、船の所有や積荷の搬入と販売、船の運航がそれぞれ問屋仲間として独立するという組織的なものであった。北前船の寄港地には船が運んだ各地の特産品が見出されて文化交流の研究対象ともなるが、樽・菱垣両廻船に関するそのような痕跡が乏しいのは、この運航、運営形態の差異による。

郷土資料館常設展示室には廻船の航路を図示したパネル（第1図）がある。江戸へ向けて出帆した廻船は、通常紀伊半島を巡って鳥羽を目指す。途中で暴風雨に遭遇した場合には、一時避難や風待ちのため港に逃げ込む。半島を半周すると危険海域の熊野灘に出る。現在でも尾鷲市一带は東南方向から風が吹き付ける暴風雨地帯で、須賀利町周辺には江戸期の難船関連の史料が多く残る。ここからリアス式海岸で知られる的矢湾一帯を過ぎて鳥羽港に至る。多くの廻船がここに寄港する。その理由は、ここより東は伊豆半島まで砂浜海岸が連続して風待ち港がない。鳥羽で日和（天候）を見誤れば途中で戻るか、荒れ狂う海で難儀をすることになる。鳥羽で英気を養った後にしっかり日和見をし、沖乗りをして伊豆半島を通過して船番所（下田、後に浦賀）で船切符を確認後、一気に江戸へと向かう。上方から江戸への航海は通常では10日以上、江戸到着の順位を競う「新酒番船」の時には2.5日という最短記録もある。積荷優先で時間を競う航海は、独特の船体や操船技術、海難保障の制度を育んだ。この実務的に完成された運営体系の中では、文書として残る業務記録以外の史資料はなかなか生まれそうにない。



第1図 上方・江戸間菱垣・樽廻船航路図

2 廻船問屋にまつわる事蹟

それでも樽廻船の廻船問屋や酒荷積問屋の事蹟が全くないというわけではない。廻船の安全な航行を願ったことを物語る事蹟をいくつか見ることができる。

鳥羽周辺の日和山 廻船の安全な航行で樽廻船問屋が重視したのは、熊野灘から志摩地域のリアス式海岸沿い、特に鳥羽港とその周辺であった。そこには樽廻船問屋の名を記した石造品が数カ所確認でき、郷土資料館でも過去に調査を実施したことがある。よく知られたものでは、鳥羽日和山に据えられた方角石がある。日和山とは全国の漁港直近にある眺望のきく小山や高台で、出漁に際して天候を見定める見晴台である。多くの漁村に通有で、雲行きや海面の状況に目を凝らして天候を予想し、漁師は海に出た。日和を見ることも漁師の腕である。この日和山の眺望台に方位を記した盤面を持つ方角石を据えた事例がある。江戸時代のものではこの盤面に十二支を用いて方角が記され、「子」が北を示す。順に「卯」が東、「午」が南、「酉」が西となる。方位を合わせて地面に設置され、雲の流れや風向きを観察して天候の変化を予想した。鳥羽日和山には他の事例と比較しても大形のものが見られる。それは花コウ岩製の八角柱で、上面には円形の台を削りだして十二支と磁針を刻む。側面には、「撰州灘 樽廻船中」、「文政五年壬午二月 石工平吉」と刻まれる。リアス式海岸に沿って南側、的矢湾周辺にもいくつかの日和山があり方角石がある事例も多い。その形状はやや簡素で円柱形、同様に上面には十二支を用いた方角表示及び、「文政五年 灘廻船中」の陰刻がある。日和山も方角石も第一義的には地元の漁師や船舶に関連するものであるが、この地域のものには「灘」や「樽廻船中」と刻まれ、樽廻船に関連したものであることが明白である。鳥羽日和山のそれは御影石を用いて上方で製作されて搬入された可能性が高い。

正福寺の常夜燈 同じように上方で製作されて運ばれた事例として、的矢湾からさほど遠くない青峰山正福寺楼門前の常夜燈がある。正福寺は、青峰山山上に位置する真宗の古刹で、本尊は十一面観音菩薩像である。所在地は、三重県鳥羽市松尾町。付近にある巨岩が東方の海上から目印となり、沖を航行する船舶や、沿岸で暮

らす海女からの崇敬を集めてきた。その壮大な楼門前に常夜燈がある。基礎の石組みの基底から約7mの高さがあり、本体は花コウ岩製である。竿部には「海上安全 天保八丁酉年五月」、台の部分には段ごとに「大坂 西宮」、「樽船問屋中」と刻む。これについては本寺に文書が残され、近郊の磯部の浜から陸揚げされて奉納されたことがわかる。その際に常夜燈の燈火料もあわせて納められた。

龍田大社の常夜燈 廻船問屋が大形の常夜燈を奉納した事例は他にもある。その場所は奈良県龍田大社（龍田本宮）である。大社の所在地は生駒郡三郷町立野。廻船の安全確実な運航を左右する「風」にまつわる神社で、奈良盆地を抜けていく風の通り道に祀られた。筆者は本事例を『西宮町誌』（明治16年刊行 大正15年復刊）の記述の中に見出した。廻船問屋による江戸－上方間の千石積み廻船の運行は明治時代初年に衰微したため、記載の内容は町誌刊行当初の頃に残されていた樽廻船の運航の様子を簡潔にまとめたものである。その中にあった「・・・大和龍田神社に灯籠を献ず・・・」という記載を頼りに現地を確認したものである。

現在境内には関連すると思われる常夜燈が3基ある。境内入口の鳥居脇左右に2基、拝殿前の階段横に1基で、いずれも花コウ岩製、地面からの高さ約3.5mを測る。鳥居脇の2基は天保3年（1832）の建立で、祈願内容は「海上安全」、基壇正面側に上から「江戸廻酒諸荷物 積問屋



第2図 龍田大社常夜燈

仲間」と記す。向かって左側は基壇側面に「西宮」、右側には「大坂」とある。酒諸荷物問屋とは「江戸積諸荷物廻船問屋」とも「江戸酒積問屋」とも記される樽廻船問屋のことで、大坂と西宮にそれぞれ認可された廻船仲間が天保期に奉納したものであることがわかる。

3 豆州の風待ち港へ

伊豆半島周辺は魚資源に恵まれた豊穡の海で

ある。東廻り航路の大型船に限らず小形の漁船や地廻りの船舶も行き交う。年貢米や御城米を運ぶ公用船の出入りもあり、港の利用者は一様ではない。そのような中で、樽廻船問屋や上方文化の痕跡を探してみた。

豆州下田港 伊豆半島南端は上方関西方面からは遠隔地であるが、千石積みの廻船には馴染みの地である。江戸時代前期には船番所が置かれた下田港や、先述の航路図に示された風待ち港の「妻良」、「子浦」、「長津呂」などがある。志州鳥羽から七十五里を無事乗り切った船頭や水主たちが一息つく休憩場所でもあり、天候が悪化する時には風待ちして天候の回復を待つ「風待ち港」でもある。

下田は元和2年(1616)に遠見番所が置かれて以後、享保5年(1720)に同様の機能が浦賀に移るまで、海上の関所として機能した。その後もその立地と湾の形状が幸いし、船舶の停泊地として重宝された。上方から江戸へ下る廻船にとっては、伊豆半島先端を回ってすぐ、船を迎え入れるかのように湾口が開く。無理な操船をすることなく入港できる。当初の



第3図 下田妙見宮常夜燈

船番所は外洋に接した須崎に置かれたが、後に湾入り口の手前の大浦に移った。懐の深い湾内は暴風を避ける良港として大型・中型廻船の停泊地ともなり、東側には日和山も所在する。この湾入口の下田市三丁目の浜に妙見神社がある。小規模な社殿を構える御宮であるが、北側の湾内に向かって2基の常夜燈がある。紀年銘があって造立は明治8年(1875)、向かって右側には「撰津國 樽廻船」、左側には「撰津國 酒造組」と刻まれる。2基ともに花コウ岩製で、地元産石材による石塔類が優越する本地域にあって、その形状やデザインも含めて上方からの搬入品を思わせる。下田一帯は江戸時代の安政期に大津波で一度壊滅状態に陥っているこ



第4図 伊豆半島地形図(一部加筆)

とを考えると、千石船全盛期に建てられた先代があったのではないかと思いたくなる。

妻良と子浦の港 伊豆半島を南から西側に回り込むあたりに、風待ち港が多い。大型廻船の航路に近接することと、切り立って複雑な海岸線が連続する地理的な特性が影響している。志州鳥羽で風待ちをした後、一気に難所を乗り切った航海が一段落する廻船にとっては、江戸まで航行する直前の休憩場所としても絶好である。さらに、駿河湾内を行き来する中小の廻船が利用する港としても重宝された。樽廻船と縁の深



第5図 妻良漁港周辺地形図(一部加筆)

い当該地付近の港としては、第1図の通り「子浦」、「妻良」、「長津呂」(石廊)がある。なかでも、子浦と妻良は風待ち港の典型例である。現在では、全体として妻良(漁)港と呼ばれ、子浦はその中の子浦地区として包括されている。地理的には湾口が駿河湾から外洋に向かっ

て開け、湾内は子浦側と妻良側の二つに分かれる。無理な操船を必要とせず、西北、西南の双方向から湾内へ直線的に出入りができる。これも風待ち港として優良な理由である。新酒の季節に吹きすさぶ強い北西風による航海の難儀をここで避けた。湾内の北側に子浦港が、南側に妻良港がある。

子浦は湾内北側の海岸沿にあり、やや東西方向に長く二つの地区に分かれる。江戸期には東子浦、西子浦として双方にそれぞれ名主が置かれた。村落調査ではそれぞれに寺院と神社があり、墓地や主要な祭礼もそれぞれに異なることから異なる民俗空間を持つようである。西子浦の八幡神社に対して東子浦側には伊鈴川神社があるが、さらに浜側に下った小丘上に「住吉神社」がある。この神社は創建時期が不明であるが、海上安全を願っての建立である。西子浦沖の海上から神社を眺めると、子浦の浜の東西それぞれ



第6図 子浦 住吉神社近景（中央樹林脇に鳥居）

れを限る「松ヶ下」と「白埼」の岬間の中央に位置し、浜の正面奥に祀られて象徴的である。

子浦側の日和山は西子浦の西側急斜面を登った上にある。全国の日和山の調査を続けられた南波松太郎氏の記録を参照するなら、日和山及び方角石は後世の改変を受けたようである。繁茂した樹木がなければ、湾内はもちろん外海西側から南側への眺望は素晴らしいが、日和山周辺は近代に入って軍関係の施設が置かれ、明治8年（1875）に設置の方角石も損傷を受けて倒立し、さらに改刻が見られる、という。南波氏は『いつにき』（文政5年刊行）という文献に方角石の記載があることから、子浦日和山には江戸期に遡る先代の方角石があったとされる。その後の確認では個人宅に現存するらしい。

妻良側の日和山にも方角石が現存する。そこへは妻良漁港から直接には登られず、国道136

号から外れてハイキングコースを辿り、途中から夫婦岬への標識を頼りに海側へ藪を分け入ることになる。妻良港入口を眼下に見下ろす尾根のピーク、標高約107mあたりの数m四方の平坦面北側に方角石が置かれる。その平面形は円形で二段、基底部で直径29cm、上段で15.5cmを測り、石材は伊豆石かと思われる。写真のとおり文字と方角が刻まれるがその周囲を石材片と



第7図 妻良日和山方角石

モルタルで補強され、設置当初の様子及び設置時期は不明である。また、方角石から約5.5m南側に石碑がある。簡易な基壇上に高さ約89cm、厚み約20cmの盤面に、「風之神 日和山」と刻む。この場所が日和見をする実務的な場所と同時に、いつの頃からか安全を祈る場所となった。

4 まとめ

幕府天領から年貢米を津出しする船は主に妻良港側、上方からの廻船は子浦港側に停泊した。そのため、子浦側には廻船問屋とそれぞれに関係の深い多くの船宿があった。先述の『いつにき』には、子浦にあった「御影屋」が日和見に定評があったと記される。同様の船宿に関する記録は下田側にもあり、廻船問屋と現地の船宿との連絡は頻繁に行われた。

現地は重なる火災や津波で多くの事蹟が今に残るというわけではないが、いくつかは見いだすことができる。今回も訪れることができなかった「風待ち港」への訪問を期して筆を擱く。

参考文献

- 南波松太郎 1984「Ⅲ 日和山」『船・地図・日和山』南波松太郎先生文集出版実行委員会編集
- 安田尚央他 2013「生業に着目した集落の環境認識に関する研究」『景観・デザイン研究講演集』9

関西大学非常勤講師